

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	質問に対する回答回避発話(2)：質問に関連することを述べる方策
Sub Title	
Author	田中, 妙子(Tanaka, Taeko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2017
Jtitle	日本語と日本語教育 No.45 (2017. 3) ,p.67- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20170300-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

質問に対する回答回避発話（2）

—質問に関連することを述べる方策—

田 中 妙 子

1. はじめに

筆者は、田中（2016）において質問に対する回答回避発話の用例調査を行い、各用例を回答回避の方策によって9項目に分類した。その分類の一つである「相手の質問に関連することを述べる」という項目については、用例が少なく、詳細な分析ができなかった。本稿では、その後に採取した用例を加え、この項目に関するより詳細な分析を行う。

2. 回答回避発話とは

田中（2016）に述べたように、会話の中には、発話行為としては質問と応答という形であっても、質問に対して適切な情報を提供せず、「情報の提供をしない」という意図を何らかの方策を用いて伝達する発話が見られる。本稿ではそれを回答回避発話と呼ぶ。

回答回避発話は、質問発話に後続するものである。質問発話は、ここでは情報要求、確認要求、同意要求を意図した発話とする。また、「教えてください」「説明していただきたいのですが」等、情報の提供を要求する発話も含む。更に、「～かしら」「～かな」など、疑いを示す発話が会話の中で質問の機能を帯びる場合も含む。

回答回避発話は、質問発話に回答しないという意図を、相手にわかるようになに言語化した発話である。したがって、真実を隠すために、相手に悟られずに嘘をつく場合は、回答を避ける意図が相手に伝わらないため、調査

の対象外となる。

田中（2016）では、回答回避発話をその方策の違いによって以下の9項目に分類した。本稿の分析対象となるのは、このうちの④の項目である。

- ①回答しないということを明示的に述べる
- ②回答しないことの理由を述べる
- ③回答の必要性がないことを述べる
- ④質問に関連することを述べる
- ⑤回答の代案を示す
- ⑥曖昧な回答をする
- ⑦曖昧な述べ方をする
- ⑧明らかに事実ではない回答をする
- ⑨質問と全く関連のないことを述べる

3. 用例

稿末の「用例資料」に記したとおり、テレビドラマのシナリオを資料とした。用例は、複数の方策が同時に含まれているものを分けて延べて数えると、田中（2016）で既に採取した11例を含め、全体で41例である。第4章にすべての用例を挙げる。

4. 調査結果と分類

「相手の質問に関連することを述べる」という方策には、回答を回避するため、相手に行行為要求をする方策と、相手の質問に直接答えず、考え方をずらす方策とが見られる。以下にそれぞれの詳細を述べる。

4-1 行為要求の方策

禁止（例1～5）、命令（例6～10）、勧誘（例11）の行為要求表現を用いて、相手の質問を拒否する発話をを行う方策である。内容としては、「聞くな」「やめろ」のように質問者の話題提示を止めるための行為要求をするも

のと、「そんな言い方をするなよ」「ふざけないで」のように質問者の言い方・発話態度に対して行為要求をするものが見られる。

注：以下の用例の〔 〕内は筆者による補足説明である。また、表の左端の数字は用例の通し番号を表す。用例番号に（ ）で別の番号が添えられているのは、一つの用例に複数の方策が含まれるため、（ ）内の番号の用例としても同時に挙げているということを示す。

1	少年 119	小林「ジャズって知ってるかい」H「ジャズ？」小林「東京にいた頃、上野にカフェがあってよく行ったんだ。そこで流れていたのがジャズでね。コーヒー一杯、頼んで、ずっと音楽を聴いていたんだ」H「誰とオヤ」小林「聞くな」H「恋人か？」
2	シュウ 276	修「[略]……処女でなかったのがそんなに許せなかっただけか？たった一回の間違いが、そんなに許せなかっただけか？」シュウ「その話はするな」
3 (19)	祖国 108	小野寺「あの時、この会社を辞める時は一緒にやつて言ったのはお前だぞ」／山崎、傍いで貧乏搔りをしている。／小野寺「あの言葉を撤回するのか。それとも忘れたのか」山崎「そんな言い方をするなよ、あんまりだよ」
4	日輪 60	ツヨシ「オジにはいくら入るんじゃ」佐倉「……」ツヨシ「立ち退き料、いくらピンハネしたんじゃ」佐倉「人聞きの悪いこと言うな」〔中略〕佐倉「この旅が終わったら、おまえにも払うものは払たる。それでええやろ」
5	不機嫌 237	仁子「なんで、こないだ言ってくれなかっただんですか？」南原「言ったら何かが変わった？」仁子「……」南原「最後にキスさせてくれたとか」仁子「ふざけないで」
6	僕は 31	幹「アキラ、梢子の父親のこと、聞かないよね……」アキラ「……」幹「なんで聞かないの」アキラ「……」幹「あたしたち、大事なこと、ちっとも……」アキラ「(さえぎって) や、やめろ！」幹「……」アキラ「き、聞きたくない！」幹「……」

7	黄落 116	[蕗子は義父が恋人に書いたラブレターを読む] 友明「二人とも元気だね……」蕗子「あれは、おじいちゃんもあのおばさんも生命の最後の輝きよ。はじめはとても嫌らしく思つたけど、今はそう思わないわ。一生の締めくくりとして、いいじゃない？」友明「もうよせ。そんな話……」蕗子「どうして？ わたしもそんな風になりたいわ」
8 (17)	官僚 86	朝原「何がフリーウェイだ。そんな夢みたいな話」日向「しかしお義父さん、実現したら凄いですよね」朝原「……うるせえ黙ってろ！」
9	ミエル 128	剛「なんでここに残るんだよ」幸介「自分で考えろバカ野郎」
10	北の 192	シュウ「純君に手紙書いたの」五郎「——」シュウ「純君今どこにいるの？ 居場所教えて」／間。／五郎「教わってどうなるンだ」／風呂の中／五郎「もう忘れろよ」／間。／シュウ「そうだね」
11	ピューティ 253	柊二「病気って何なの？」杏子「え……？」柊二「いや、今、難病と戦うって言ったからさ」杏子「……ああ。うん、やめよ、その話は。言葉にすると、スゥッてこの辺に病気がやってきて、私、病気に飲み込まれそうになるからさ」と、明るく言う。そして淋しく響く。

4-2 答え方をずらす方策

答え方をずらすとは、質問された際に、質問者が期待する適切な情報を提供せず、別の内容に言及して応答するということである。「非難」「答える意思がないことの表明」「質問発話の別の側面への言及」という方策が見られる。

4-2-1 非難

相手の質問内容や質問態度に反応し、〈うるさい〉〈しつこい〉〈あんまりだ〉というような非難をすることによって、回答を回避する方策である。

12	ディア 18	静子「——どこへ行くの？」裕司「——っせえんだよ」／裕司、スニーカーをつっかけ出していく。
13	ディア 17	大宮、バッグを持って、立つ。／和枝「ちょっと、どこへ——」大宮「うるさい」／大宮、出でいく。
14	ディア 22	少年A「おい、裕司じゃねえかよ」少年B「ネンショウ、いつ出たんだよ？」裕司「関係ねえだろ」少年A「だれよ、そいつ？ 紹介しろよ」少年B「ねえ、ドライブしません？」裕司「うるせえな！」
15	ディア 24	大宮「どうしましたか？」佐竹「うるさいな——」
16	僕は 30	【アキラが澤田に反抗的な態度をとる。】幹「(むっとして)なんで」アキラ「……」幹「おかしいよ」アキラ「……」幹「アキラ、澤田さんのこと、兄さんみたいだって、言ってたじゃん」アキラ「ビ、ビール、買ってきた」幹「はぐらかさないで！」アキラ「う、うるさい！」
17 (8)	官僚 86	朝原「何がフリーウェイだ。そんな夢みたいな話」日向「しかしお義父さん、実現したら凄いですよね」朝原「……うるせえ黙ってろ！」
18 (26) (28)	本当 72	【章次が自殺した同級生のノートについて尋ねる】朝美「こんなの、知らないよ」章次「ああ。それはそうだろう」朝美「パパしつこい」章次「ただ、こんなノートがあったって、お母さんが——」朝美「パパしつこい」章次「——」朝美「関係ないっていったでしょう」章次「そうだけど——」朝美「こどもを信じてよ」章次「なぜお前の名前なのか」朝美「パパしつこい(と自分の部屋へ)」章次「——」
19 (3)	祖国 108	小野寺「あの時、この会社を辞める時は一緒にぞって言ったのはお前だぞ」／山崎、俯いて貧乏振りをしている。／小野寺「あの言葉を撤回するのか。それとも忘れたのか」山崎「そんな言い方をするなよ、あんまりだよ」

4-2-2 答える意思がないことの表明

理由や事情説明を求める質問に対し、答える意思がないということを様々な表現によって表明し、回答を回避する方策である。「駄目なものは駄目だ」「嫌だから嫌だ」というような同語反復や、「とにかく」「いいから」

「～からいいでしょ？」「～と言っているでしょ？」などの表現によって結論のみを主張し、それ以外の説明を拒否するもの（例 20～26）が見られる。また、同じ表現を何度も繰り返すことによって、それ以上は答えたくないという反抗的な意思を示すもの（例 27, 28）もある。

20	天国 120	[小林がプロポーズするが、きぬ江は応じない] 小林「どうして？」きぬ江「駄目」小林「なんで」きぬ江「駄目なものは駄目」小林「——」
21	少年 118	H「僕、金田さん嫌いや」敏子「……なに言うん、急に」H「お母ちゃんも嫌いや」[中略] 敏子「なあ、何で嫌いや」／H、歩いて行く。／H「嫌いやから嫌いや」敏子「そんな言い方ないやろ」H「あるわ」
22	黄落 64	露子「(ヒソヒソ声) あたし、泊らない」友明「(ヒソヒソ声) 何言ってんだよ。オヤジ一人にしておくわけにはいかないじゃないか」露子「じゃ、あなた泊って」友明「そんな……何かあったのか?!」露子「とにかく、あたしは泊らない」友明「今夜は泊るって、さっき言ったじゃないか」露子「……」
23	夏の 175	[沖子は病気で、元船長の大熊に特別な思いがある] 諸が隠し持っていた船長帽を大熊にかぶせる。／大熊「ん!? (と帽子を取って) ……」諸「坂本さんから借りてきたの」沖子「熊さん、いいじゃない。今日はそれ、かぶっててよ」大熊「どうして？」沖子「いいから、かぶっててほしいの」大熊「(躊躇しつつ) しょうがないな。沖ちゃんがそう言うなら (と帽子をかぶる)」沖子「男っぷりがゲンと上がったよ」
24	シュウ 265	母「なんのさ、この五万円でいうのは？」少女「別にいいじゃない」母「ちょっと異常でねーの？ 携帯で月に五万でなに？」少女「バイトするからいいでしょ！」母「どこにそんな掛けてるの？ 悪いつきあいしてるんでねーべな！」少女「母さん、人のこと言えないでしょ！」
25	ディア 23	[裕司が佐竹の家に来て、けんかをした後] 大宮「あ、じゃあ、来たことは——来たんですか？」佐竹「——ああ」大宮「それで——」佐竹「——帰った」大宮「あの子、なんか——」佐竹「帰ったと言ってるだろ——あんたも、帰ってくれ」／佐竹、茶の間へ引っ込んでしまう。

26 (18) (28)	本当 72	[章次が自殺した同級生のノートについて尋ねる] 朝美「こんなの、知らないよ」章次「ああ。それはそうだろう」朝美「パパしつこい」章次「ただ、こんなノートがあったって、お母さんが——」朝美「パパしつこい」章次「——」朝美「関係ないっていったでしょう」章次「そうだけど——」朝美「こどもを信じてよ」章次「なぜお前の名前なのか」朝美「パパしつこい（と自分の部屋へ）」章次「——」
27	光抱く 35	[電話] 三島の声「なぜだ？ はっきりと言え」勝美「すみません」三島「何度も同じことを言わせるんだ！ 顔を上げてみろ！ 何だあ、その目は!? 僕を馬鹿にする気か！」勝美「……すみません」三島「女だからと思って手加減しておけばつけ上がりやがって！ えっ、すみませんしか言えんのか！ こら！ こっちを向かんか、この野郎！ 本心じゃ何を考えてる？ 僕のことを何だと思ってるんだ？ 言つてみろ！ この口を開けてなにか言ってみろ！」勝美「すみません（反抗の響きがある）」
28 (18) (26)	本当 72	[章次が自殺した同級生のノートについて尋ねる] 朝美「こんなの、知らないよ」章次「ああ。それはそうだろう」朝美「パパしつこい」章次「ただ、こんなノートがあったって、お母さんが——」朝美「パパしつこい」章次「——」朝美「関係ないっていったでしょう」章次「そうだけど——」朝美「こどもを信じてよ」章次「なぜお前の名前なのか」朝美「パパしつこい（と自分の部屋へ）」章次「——」

4-2-3 質問の別の側面への言及

一つの発話は様々なレベルの機能を持つので、質問の発話にも、中核となる「情報要求」の機能と、それに付随する様々な機能・情報が含まれる。質問者が期待する十分な情報を与えず、その質問が持つ別の側面の機能や情報に反応するというのがこの方策である。この方策として、質問内容が質問者とは関係がないことであるということを指摘するもの（例 29～32）が見られる。また、例 33 では、伝七の質問の主旨は〈さぶが差し入れたものをどうするのか〉ということであるが、さぶとの関わりを絶とうとしている栄二は、伝七が自分を「栄二」と呼んだことに対してのみ〈俺は「栄

二」ではなく、「ぶしゅう」という名だ〉と反応し、さぶの差し入れに関しては答えていない。例 34 では、沖子の質問の主旨は第一発話の〈なぜ渚が急に帰ると言い出したのか〉ということであるが、沖子とその娘に遠慮している渚は、沖子の「泊まっていけばいいじゃない？」という第二発話に対してのみ「今日は家で寝るから」と答え、帰る理由を述べていない。その他、質問者の理解能力や理解の必要性に言及するもの（例 35～37）、質問に対して質問で返し、相手の質問の正当性や妥当性を問うもの（例 38～41）が見られる。

29	マチベン 139	涼子「あれで、気がすんだんですか？」みゆき「あんたには 関係ないわ」
30	ディア 18	大宮「お母さんは？」裕司「——いねえよ」大宮「——そ うか、仕事に出掛けたのか。お母さん、化粧品のセールスして るなんだよな。大変だよな、女手ひとつで」裕司「いね んだよ」大宮「いないって——どこへ？」裕司「関係ねえだ ろ」大宮「しかし、君ひとりじゃ——」裕司「いねえ方がい いんだよ、あんなの——」
31	ディア 19	大宮「お母さん、時々しか帰って来ないって——」裕司 「——帰ってくることねんだよ」大宮「でも、どこに——？」 裕司「関係ねえだろ」大宮「そりゃ——だけどなあ——」
32	ミエル 114	剛「やめたんだよカメラ」サキ「え、どうして？」剛「関係 ねえだろうがよ、てめえに。いいから帰れよ」
33	SABU24	〔さぶが栄二に差入れをする〕栄二「知らねえ奴だ」岡安「そ うか、この差入れはどうするんだい」栄二「いらねえ」岡安 「うまそうな鮨が入っているが、いらねえんだな」栄二 「……」岡安「伝七。皆で処分しろ」／伝七は風呂敷包みを 受け取った。／岡安「栄二」／栄二は掛夜具を頭までかぶつ ていた。／岡安「さぶという人が、風邪をひくなと言つ ていた。又、来るそうだ」／栄二が嗚咽をもらした。／伝七 「栄二、いいのか、鮨の他に団子に煎餅、下帯、手拭い」栄 二「おれは、ぶしゅうだ!!」

34	夏の 156	[母親のいない渚は沖子を母親のように慕っているが、沖子の実の娘の洋子が帰省したため、遠慮する] 渚「[略] ……お母さん、私、今日はこれで帰る」沖子「どうして？」渚「ご飯の用意しといたから、洋子さんといっしょに食べて」と玄関へ行く。 沖子「(追いかけて) どうしたのよ、急に？ 泊まっていけばいいじゃない？」渚「今日は家で寝るから。それじゃ」と出していく。
35	ちゅら 226	[小学校高学年の恵里と文也が結婚の約束をする。恵里の弟の恵達は低学年。] おばあ「おめでとうやあ」恵達「何が？ 何がおめでとう？」恵里「て～がくねんには、わからん」恵達「なんですよ」
36	少年 125	[お兄ちゃんは警察に連行される] H「お兄ちゃん、どうなるん」盛夫「お前は分からんでええ」
37	少年 158	Hと郁夫が行く。憲兵が走っていく。緊張した雰囲気。警察の男がさりげなく張り込んでいる。／H「(近くにいたおじちゃんに) なんかあったんか？」近所のおじちゃん「子供は知らんでええ」
38	楽園 187	[電話で模試の結果を聞く。] 優「結果はどうだった？」高柳の声「なんで君にそんなこと教えなくちゃなんないの？」
39	本当 54	大高「やっぱり事情を聞きたいわ」稻田「聞きたい」[中略] 元洋「みなさんには、そんなに事情を聞きたいですか」稻田「聞きたい」元洋「それで人と人がどんなに傷ついてもですか。ユニフォームは大至急製作に入っています。それでも事情が大事ですか？ いえないこともいわなきやいけませんでしょうか？」(有無をいわせない迫力で) 申し訳け——申し訳けありませんッ」
40	マチベン 159	[弁護士の涼子が新田に質問する。] 涼子「そうですか……。ご結婚されたことは？」新田「……裁判に必要？」

41	天国 114	<p>〔英子はマリの恋人の元妻。再婚話が出ている〕 マリ「アタシが喰わせて來たんだからね、言っちゃ悪いけど。だから、そっちへ送金出来たんだよ。アタシ、何なの。いいツラの皮じゃん。頼んだ覚えない? 確かにそうだけど、もうかったるって言ってんの。オトコ、出来たんだって?」</p> <p>英子「——あの人人がそう言ったんですか」 マリ「言わない。アタシが見破った」 英子「ウソ」</p>
----	--------	---

5. 終わりに

今回の用例を人間関係の観点から見ると、その多くが家族か親しい知人、あるいは敵対する関係の人間同士である。そのため、相手に配慮して婉曲的述べるような方策はあまり見られない。もともと本研究は、言いにくいことを避けるために人はどのような方策を用いるかという疑問から始まったが、ポライトネス上の配慮による回答回避だけでなく、それ以外の要因によるものにも調査対象が広がった。回答回避表現の全体像とポライトネスとの関連については稿を改めて論じたい。

用例資料

以下、【】内は作品名の略称を表す。

日本脚本家連盟『テレビドラマ代表作選集』

(1998年版) 寺内小春「黄落」【黄落】

(2000年版) 山元清多「ディア・フレンド」【ディア】／田中晶子「日輪の翼」【日輪】／竹山洋「少年H」【少年】／北川悦吏子「ビューティフル ライフ」【ビューティ】／畠澤聖悟「シュウさんと修ちゃんと風の列車」【シュウ】

(2002年版) 鄭義信「僕はあした十八になる」【僕は】／松原敏春「天国までの百マイル」【天国】／岡田恵和「ちゅらさん」【ちゅら】

(2003年版) 竹山洋「SABU～さぶ～」【SABU】／伊藤康隆「夏の約束」【夏の】／倉本聰「北の国から 2002 遺言」【北の】

(2004年版) 中園健司「樂園のつくりかた」【樂園】

(2005年版) 大森美香「不機嫌なジーン」【不機嫌】

(2006年版) 山田洋次ほか「祖国」【祖国】

(2007年版) 清水曙美「光抱く友よ」【光抱く】／井上由美子「マチベン」【マチベン】

(2009年版) 山田太一「本当と嘘とテキーラ」【本当】

(2010年版) 橋本裕志「官僚たちの夏」【官僚】

(2011年版) 青木豪「ミエルヒ」【ミエル】

参考文献

田中 妙子 (2016) 「質問に対する回答回避発話—ドラマのシナリオを例に—」『日

本語と日本語教育』第44号 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター